

## 令和2年度いじめ・不登校・暴力行為等の未然防止事業(心の交流事業) 成果報告書

### 1 指定校・指定校群 ( 坂出市立坂出小学校 )

### 2 実施の内容

#### (1) 年間を通した「えま活動」(ペア活動)

1年と6年, 2年と5年, 3年と4年をペア学年, さらにそれぞれの学級をペアクラスとして, 異学年で活動を共にする「えま活動」を行った。今年度は6月に自己紹介のカード交換, 10月にペア読書, タグラグビーを用いたペア遊びを実施した。また, 運営委員会が中心となり, 交流が制限される環境下でも心のつながりを大切にしたいという思いから, 友達の良さを掲示できる「えまの木」を各クラスに設置した。(※後述)

#### (2) 個々の活動をつなぐ教職員の意識

毎月道徳的価値について考えたり, 行動したりする機会となるように設定した「ハートウィーク」では, 各学年が道徳や総合的な学習の時間などで考えた内容を全校生に発信した。特に, 9月の人権月間では, 「ノーコロナハラスメント」について全校生, 教職員が共通理解をする機会とした。さらに, 人としての美しい行動を当たり前にとることができる感覚, 実践力を育てるために設定した「チャレンジウィーク(月毎のあたり前宣言を全校で実行する)」との関連を図り, 意識の向上をねらった。

### 3 成果

#### (1) アンケート結果の変遷

質問項目	平均点(6月)	平均点(11月)
私には, 良いところがあると思う。	3.1	3.2
私のクラスはいろいろな活動に協力して取り組んでいる。	3.5	3.7
私は周りから感謝されたことがある。	3.4	3.6
家族の人は, 私のがんばりを認めてくれる。	3.6	3.7
先生は, 私をほめてくれる。	3.5	3.6

上記のアンケート結果により, 「私には良いところがある」という項目の結果がわずかながら向上している。これは, 「えま活動」などを通して, 価値ある体験を設定し, 自分や友達の良さを「えまの木」に見える化したこと等が要因と考える。

新型コロナウイルス感染症予防に伴う休校措置のため, 児童は活動を制限されることが多かった。しかし, 制限の中でも5・6年生が中心となり, 自分達ができる事を考え活動内容を企画することができた。また, この環境下をプラスに考え, 身近な友達の良さを見付けようとすることができた。さらに, 家庭にも良さ見付け文化を広げる発信を行ったことで, 教師だけでなく, 家庭でも頑張りを認められるようになっている。このような取り組みを通して獲得した自尊感情の高まりは, 児童のやる気や認め合う風土に繋がった。

## (2) 自発的・自治的な交流活動における子どもの様子

### 「えま活動（えまの木）」

今年度、運営委員会が中心となり、「えまの木」を発案し、年間を通じた活動が始まった。各クラス1本の幹を掲示し、そこに友達の良いさを記入したカードを貼れるようにした。1学期にはクラスの友達の良いさを芝生のカードに書き、10月にはペア活動を通して見つけた友達の良いさを葉のカードに書き交流を行った。12月には、さらに木を成長させたいという運営委員会の思いから「えまポスト」を設置し、自由にカードを記入できるようにした。この仕掛けにより、子どもの良さ見付けの視点が「日常の事柄（遊び、登下校等）」や「日常で接する人々（異学年、地域の人々）」へと広がった。そのようなカードにスタンプシールを貼ることで、視点の広がりを価値付けることができた。また、成長する木を交流活動の中心においたことで、「花を咲かせたい。」「実を实らせたい。」という意欲の高まりにつながっている。実を实らせた全クラスの木々を卒業式には虹をかけ掲示したいという、運営委員会の児童の長期的な視点も生まれ、「えまの木」の成長とともに「良さ見付けの文化」が広がっている。



ペア交流前の自己紹介・・・・・・・・・・交流活動・・・・・・・・・・交流活動後の振り返り・新たな活動

### 「ハートウィーク（人権月間）」

道徳的価値について考える「ハートウィーク」では、9月の人権月間を好機に捉え、「Noコロナハラスメント」について全校放送での共通理解を図った。坂出小学校が全校生の約束として呼び掛け続けてきた「自分を大切に 人を大切に～自分がされていやなこと（ハラスメント）は人には絶対にしません～」をモットーに全校生、全職員で共通理解した。また、実践につなげるため、9月のあたり前宣言(生活目標)を「マスクを正しく付け、思いやりのソーシャルディスタンスを保ちます」とした。しかし、話し合いや遊びの中で心の距離が近づくほど、体の距離を保つという事の難しさと大切さを児童は肌で感じており、ソーシャルディスタンスを保つ事の難しさを振り返っていた。

## (3) 総括

- ・今年度、学校における新しい生活様式の中、児童と新たな活動を発足するにあたり、児童の考えを大切にしながら「えまの木」の活動を始めることができた。活動の形態や人数が制限される中でも継続して行える活動にしたことで、目標をもち取り組む高学年の姿が見られた。
- ・児童が発案したことに傾聴、共感、受容の姿勢で寄り添うことで児童の達成感が生じ、自己有用感の向上にもつながった。また、他者に認められていることを「えまの木」で感じることができ、児童の安心感につながった。
- ・アンケートの集計結果では概ね11月の方が児童の回答が肯定的であったが、個別で見ると否定的な回答をする児童が数名いる。考えられる理由として、児童の行動特性によるものと成育歴によるものの2つが要因と考えられる。児童の行動特性によるものには、個々の発達の問題が関係しており、個人内評価を大切に、発達の途中であることを教職員も保護者も鑑みる必要性を感じた。また、成育歴によるものとして、愛着の問題や保護者の過度な期待や基本的な生活習慣の乱れ等が見受けられた。運営委員の中心として活躍する6年児童の中にも、保護者からの期待や、未来への不安感から自分への評価が厳しくなっている傾向がアンケート結果から伺えた。家庭環境に課題を抱える児童、学校のリーダーとして自己の感情を制御しながら学校生活を送っている児童にも今後視点を当て、全ての児童が安心感をもって生活できるよう、保護者、地域とともに取り組んでいきたい。